

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520619

研究課題名(和文) 日本語を母語としない子どもの語彙とコロケーションの知識に関する研究

研究課題名(英文) Collocational knowledge of children acquiring Japanese as a second language

研究代表者

西川 朋美 (Nishikawa, Tomomi)

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授

研究者番号：50456331

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本在住の日本語を第二言語とする(以下JSL)子どもを対象に、イラストを用いた記述式調査票を用いて、コロケーション(具体的には名詞と和語動詞の共起関係)の産出力を調査した。調査には、200名以上のJSL児童生徒、1,400名以上の日本語モノリンガル(以下Mono)の児童生徒、60名のMono幼稚園児が参加した。調査の結果、(1) JSL児童生徒は、日本在住で日常会話においてはMonoと変わらない日本語力を持ちながらも、和語動詞の産出においてはMonoと差が見られること、(2) JSL児童生徒が苦手とする動詞については、場面と頻度要因や母語の影響によって説明されることなどを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The current study investigated productive abilities of noun-verb collocations of Japanese as a second language (JSL) children, using picture questionnaires. The participants of the study were 200+ JSL as well as 1,400+ monolingual Japanese school-aged children and 60 monolingual kindergartners. The results show (1) JSL children were not able to produce verbs like their monolingual counterparts even though those JSL children had nativelike conversational proficiency, and (2) JSL children did not perform well with verbs to which they had less exposure in their Japanese context, i.e. school, and of which collocations differ from their home languages.

研究分野：日本語教育

キーワード：年少者日本語教育 語彙 和語動詞 JSL バイリンガル 子ども

1. 研究開始当初の背景

1990年代前半の出入国管理及び難民認定法改正以降、日本の公立学校に通う外国人児童生徒数は増加を続け、2010年5月には、文部科学省が定住外国人の子どものための教育等に関する基本方針を発表し、定住外国人の子どもたちにも入りやすい公立学校を実現するための3つの施策を充実させることを明言した。3つの施策のうちの1つが日本語指導の体制の整備であり、教員研修や指導法・評価法・教材の充実などを行うとされている。(参考 URL :

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/008/toushin/1294066.htm)

しかし、指導法や教材の充実のために必要な基本的情報、つまり定住外国人の子どもたちの日本語力についての基礎研究が十分に行われているとは言いがたい。本研究は、このような基礎研究の欠如を補うことを目的とするものである。なお、教育現場での応用を見据え、文法や音声に比べて、日本語教育の非専門家にも比較的しやうい語彙力(具体的には、名詞と動詞のコロケーション)に注目した。

2. 研究の目的

本研究は、日本語を第二言語とする(以下、JSL = Japanese as a Second Language)子どもの日本語力を客観的に捉えることを目的とした調査研究である。特に、日本生まれ・育ちのJSLの子ども(=定住外国人の子ども)の場合、同年齢の日本語モノリンガル(以下、Mono)と見分けがつかないほど流暢に日本語での日常会話を操る子どもが多く、日本語力に課題があると考えられることは稀である。

本研究では、JSLの子どもが学ぶ学校現場での研究代表者らの経験、および、バイリンガル環境で育つ欧米の移民の子どもの語彙力に関する基礎研究からの知見を参考に、日本生まれ・育ちのJSLの子どもの産出語彙力を同年齢のMonoの子どもと比較する。なお、本研究では、Monoの子どもであれば母語習得過程で自然に習得するような“簡単な”語を調査対象とする。表面的にはMonoと同等に流暢に日本語を操るJSLの子どもの場合、そのような“簡単な”語の「理解」において問題が表面化する可能性は低いため、本研究では「産出」語彙力を調査することにした。

3. 研究の方法

(1) JSLの子どもの語彙データベースの作成
調査対象語の選択の最初のステップとして、JSLの子どもの語彙リスト(工藤 1999、樋口ほか 2011)と就学前のMonoの子どもの産出語彙リストである岩淵・村石(1976)を中心としたデータベースを作成した。調査対象語は、工藤、樋口、岩淵・村石の3種類のリストの共通語を候補とした。(和語)動詞を調査対象とした理由は、共通語の割合が他の品詞と比べて高かったことや、名詞と比べ

て絶対数が少なく、Monoの子どもの個人差が少ないと考えられたからである。最終的には、31語の動詞を調査対象語とした。

(2) 調査票の作成

多義動詞を含む31語、70アイテムが含まれる記述式調査票を作成した(小学校低学年にはそのうち40問が含まれた調査票を使用)。各アイテムは、動作を表現するイラストが描かれており、それに対応する動詞をひらがなで記入するようになっている。

(3) 調査対象者

調査は、全校調査を行った公立小学校4校を中心に、公立小学校やJSLの子どもを対象とした地域の支援教室の協力を得て実施した。調査参加者の人数は、Monoが1,400名以上、JSLが200名以上である。このうち一定の条件を満たした子どもを分析対象とした。JSLの子どもについては、滞日歴5年以上で、日常会話能力に関しては「Monoの子どもと変わらない」と評価された子どもであることを主な条件としている

また、調査票の一部のアイテムを対象とし、同じイラストを用いた口頭での対面調査を、Mono幼稚園児60名に対して行った。

4. 研究成果

調査票への回答の採点后、合計得点については量的に分析を行い、さらに、各アイテムの正答率や具体的な誤答については質的に分析を行った。以下が、主な結果である。

(1) 本研究の対象となったJSLの子どもは、日常会話では「Monoの子どもと変わらない」と評価されているにも関わらず、本研究の調査票の合計得点については、全ての学年において同学年のMonoとの間に統計的な有意差があり、Monoの子どもにとっては“簡単な”動詞(例:着脱動詞)の正確な産出が出来ないことが明らかになった。JSLの子どもが苦手とする動詞については、学校場面ではあまり用いられないと考えられる動詞・用法が多く、また、母語の影響による誤用も一部に見られた。

(2) ただし、JSLの子どもの合計得点については、Monoの子ども以上に個人差が大きく、Monoと変わらぬ点数を取ったJSLの子どもも多い。とはいえ、Mono平均点から標準偏差2ポイント以下、という本研究の基準による「最下位層」に位置する子どもの割合に着目すると、同学年のMonoとJSLの間では、5~10倍の違いがあることが明らかになった。

(3) Mono幼稚園児の調査結果も参考に、MonoとJSLの各アイテムの正答率の伸びを検証したところ、Mono・JSLのどちらも年齢と共に正答率が伸びていることが分かった。ただし、JSLの場合、正答率が伸びてはいる

ものの、高学年になっても Mono との差は残っていることは、(1)に述べたとおりである。

以上の結果から、日本語での日常会話では Mono と変わらないように見える、日本生まれ・育ちの JSL の子どもたちであっても、その一部に、Mono と同じ日本語力は持っていない子どもがいることが分かった。このことは、日本生まれ・育ちの JSL の子どもが在籍する学校等では、以下のような注意が必要であることを示唆している。

日本生まれ・育ちであること、また、日常会話を流暢に操ることは、同年齢の Mono と同じ日本語力を持つことを必ずしも意味しない。そして、その差は、抽象的な語の理解・使用などではなく、“簡単な”語にも見られる。

なお“簡単な”であるというのは、あくまで Mono の基準であって、その語が使用される場面や、子どもの母語からの影響を考えると、必ずしも“簡単な”ではないというのが、本研究の主張するところである。

Mono も JSL も学年と共に合計得点や各アイテムの正答率は伸びるが、順調に各アイテムの正答率が伸びる Mono に対して、JSL では伸び悩む動詞・アイテムも目立つ。低学年での一定の伸びを見せる JSL が、そのまま順調に伸び続けるという油断は禁物である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

西川 朋美・細野 尚子・青木 由香 (2016)「日本生まれ・育ちの JSL の子どもの和語動詞の産出 - 横断調査から示唆される語彙力の『伸び』 - 」『日本語教育』163号, 1-16. 査読有

西川 朋美・青木 由香・細野 尚子・樋口 万喜子 (2015)「日本生まれ・育ちの JSL の子どもの日本語力 - 和語動詞の産出におけるモノリンガルとの差異 - 」『日本語教育』160号, 64-78. 査読有

西川 朋美・青木 由香・細野 尚子・樋口 万喜子 (2013)「子どもの L2 能力評価における母語話者基準とは? - 動詞に焦点を当てた語彙力調査の結果から - 」2013 CAJLE Annual Conference Proceedings, 190-199. 査読無
http://www.jp.cajle.info/wp-content/uploads/2013/10/Nishikawa_CAJLE2013-Proceedings.pdf

[学会発表](計8件)

西川 朋美・青木 由香 (2016/2/28)「日本語を母語としない子どもの語彙とコロケ

ーションの知識に関する研究」, 子どもたちの日本語の発達を可視化する - 語彙・文法の力に焦点を当てて - 多様な言語文化背景をもつ子どもたちのリテラシーフォーラム 3, お茶の水女子大学(東京)(主催:東京学芸大学齋藤ひろみ研究室・お茶の水女子大学西川朋美研究室・筑波大学酒井たか子研究室)

細野 尚子・西川 朋美・青木 由香 (2015/6/20)「日本生まれ・育ちの JSL の小中学生の和語動詞の産出力 - 日本語モノリンガル幼児との比較 - 」2015 年度第 3 回日本語教育学会研究集会, 富山大学

青木 由香・西川 朋美・細野 尚子・樋口 万喜子 (2014/10/12)「日本生まれ・育ちの JSL の子どもの 日常語彙 の産出能力 - 小 1~中 3 調査の結果と誤答の分析 - 」日本語教育学会秋季大会, 富山国際会議場

樋口 万喜子・西川 朋美・細野 尚子・青木 由香 (2014/6/1)「日本生まれ・育ちの JSL の子どもの《日常語彙》の産出能力 - 小学校高学年調査の結果 - 」日本語教育学会春季大会, 創価大学(東京)

西川 朋美 (2013/12/7)「バイリンガルの子どもの言語習得 - 「できない」ことにも正面から向き合える年少者日本語教育を目指して - 」日本言語文化学会第 45 回研究会講演, お茶の水女子大学(東京)

西川 朋美・青木 由香・細野 尚子・樋口 万喜子 (2013/8/24)「子どもの L2 能力評価における母語話者基準とは? - 動詞に焦点を当てた語彙力調査の結果から - 」Canadian Association for Japanese Language Education Annual Conference 2013, University of Toronto, Canada.

西川 朋美・樋口 万喜子・細野 尚子・青木 由香 (2013/5/26)「JSL の子どもにとっての 日常語彙 - 動詞に焦点を当てた語彙力調査に向けて - 」日本語教育学会春季大会, 立教大学(東京)

西川 朋美・樋口 万喜子・細野 尚子 (2012/5/27)「JSL の子どもの教科の学びを支える 日常語彙 」日本語教育学会春季大会, 拓殖大学(東京)(研究協力者:青木由香)

[その他]

西川 朋美 (2016)『日本語を母語としない子どもの語彙とコロケーションの知識に関する研究』2011~2015 年度科学研究費・基盤研究 C (課題番号 23520619) 研究成果報告書

6. 研究組織

(1)研究代表者

西川 朋美 (NISHIKAWA, Tomomi)

お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系・准
教授
研究者番号：50456331

(2)研究分担者
該当なし

(3)連携研究者
該当なし

(4)研究協力者
青木 由香 (AOKI, Yuka)
富山県西部教育事務所外国人相談員, 高岡市
教育委員会外国人相談員

細野 尚子 (HOSONO, Naoko)
鎌倉市立大船小学校スクールアシスタント

樋口 万喜子 (HIGUCHI, Makiko)
横浜国立大学非常勤講師, 横浜市立蒔田中学
校夜間学級非常勤講師, NPO 法人日本語・教
科学習支援ネット